

# 防災は未来を語るもの

## 紀北中で石巻の被災者が講演

紀北町立紀北中学校は1日、防災講演会を開いた。東日本大震災の被災者が我が子を失ったことやその後の若者の取り組みを語り、全校生徒17人の大切さを考えた。

県建設技術センターの協力で、講師に宮城県石巻市の佐藤敏郎さん(54)を招いて行った。生徒のほか、住民も10人ほど参加した。佐藤さんは被災時、女川町立女川第一中学校(当時)の教師で、大川小学校に通っていた次女を亡くし、3年後に退職。現在は「小さな命を守る会」代表を務めている。

佐藤さんは被災前後の町の様子や動画などを織り交ぜて語り、「あの災害を受けても、子どもたちは町の誇りは『美しい海』と答えた。防災とは、郷土愛と志を育てるもので、あの日だけなく未来を語るもの」と訴えた。

「停電で校内放送は使



にも見

東日本大震災で被災した

佐藤さんが講演した

えない。卒業式の準備で先生はいなかった。少し考えれば分かることなのに、人の想定はなんと甘かったんだと感じた」と不十分だったことを指摘。「どこかで自分たちは大丈夫だと思っていて、私たちは何年も油断を積み重ねていた」と防災の至らなさへの後悔を語った。

その一方で「子どもたちの元気な声に、どれだけ復興の力をもらえたか」と話し、生徒たちが作った俳句を披露。2か月半後、母を失った子が(あ)いたくてでも逢えなくて、逢いたくて、親友を亡くした子が半年後に書いた「戻つてこい」と書いた。秋刀魚(さんま)の背中に乗つてこない』ほか

い女川町を受けてとめ『故郷を奪わない』と手を伸ばす』弟と久しぶりの大ゲンカ』『家がないやつと

り部は、昨年11月に高知県で開かれた「世界津波の日」高校生サミットに黒潮にも参加した。一緒に逃げていた5人

夢だけは壊せなかつた大震災』など約20句を紹介し、「最初は言葉にしていいのか迷ったが、現実や悲しみ、自分自身と向き合っていった」と話した。

また、被災した子どもたちが、半年で1000万円の募金を集めて2か所の津波到達点に石碑を建てている「いのちの石碑プロジェクト」や、語り部としての活動を紹介した。

続いて、全校児童100人が行方不明となつた。4人が行方不明となつたのが、行方不明となつたのに、曖昧なまま、やがて忘れられる。もう二度とあってはいけない」と話し、その日の大川小

4人のうち70人が死亡」、4人が行方不明となつたのに、曖昧なまま、やがて忘れられる。もう二度とあってはいけない」と話し、その日の大川小

當時6年だった次女を亡くした佐藤さんは「子どもが数多く犠牲になつたのに、曖昧なまま、やがて忘れられる。もう二度とあってはいけない」と話し、その日の大川小

生して校庭に50分待機し

た後、決められた避難場所まで津波に向かう形で避難してしまったことにについて、「命を救うのは判断と行動。組織と

して意思決定できず、避

けたら」

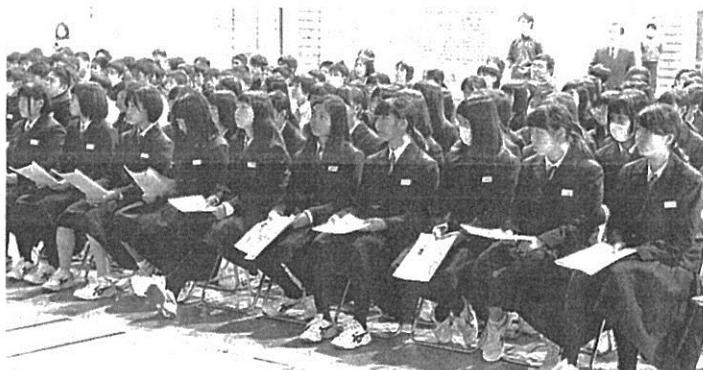
「全て震災の後に語り、「防災とは習慣と信頼をつくること。仕方がなかつたこと、一人一人が自分のこととしないせず、一人一人が自分のこととし

した」と指摘する一方で「子どもを守れない」と分かった先生はどうだけ無念だったろう」とも語

て考へてほしい」と語りかけた。

3年の垣内淳宏君は、この機会に学んだことを地域でも生かしたい

と地域でも生かしたい」と話した。



講演に聞き入る紀北中の生徒